

与謝蕪村

画・俳ふたつの道の達人

与謝蕪村——画 俳ふた つの道の達人——の概要

- 俳諧史 芭蕉 蕪村 子規の異風
- 蕪村の年譜——蕪村の移動地図と合わせて
- 蕪村の俳諧——年次に合わせて
- 蕪村の俳詩——『北寿老仙をいたむ』、『春風馬堤曲』
- 蕪村の画——文人画「夜色楼台図」、俳画「奥の細道図巻」
- 「与謝蕪村のこの一句」——現代俳人が選んだ上位句

俳諧史 芭蕉・蕪村・子規の異風

- 俳諧は変容する世相の風雪に耐えて四百年になんなんとする時間を刻んできた。

- 俳諧の糸を途絶えさせないだけの才能の輩出があった。異能の先達、特別な担い手として

- 芭蕉・蕪村そして子規、の三人を上げるのに異論はなかるべし。

松尾芭蕉

- (一六四四)～一六九四 寛永二十年～元禄七年(五十一歳没)

- 庶民の生活感覚をうたいあげる詩形式を築いた。

- 俳諧が万民共有の詩となった。

- 全国を旅して回り、人生と旅とを重ね合わせて文学世界を築き上げた。

- 「奥の細道」

- 古池や蛙飛びこむ水のおと

- 蕉門 其角・嵐雪・去来・許六

与謝蕪村

- (一七一六〜一七八三) 享保元年〜天明三年(六八歳没)
- 芭蕉流を継承しつつ、元禄の世にはなかった芳醇な香りを俳諧世界に吹き込んだ。
- 枯淡閑寂のモノトーンなものへ明るくカラフルな解放感を持ち込んだ。
- 前半生は遊歴・行脚、後半生は京都に定住、俳諧宗匠。絵師が本業、俳諧は余技
- 「春風馬堤曲」
- 菜の花や月は東に日は西に
- 春の海終日ひねもすのたりのたりかな
- 夜半門 几董・大魯 右波 月溪

正岡子規

- (一八六七)～一九〇二(慶応三年)～明治三五年(三六歳没)

- 息絶え絶えの末期症状の、幕末明治の俳諧に、起死回生の熱気を吹き込んだ。過去のしがらみを切り捨て、新たに色直しをして、新世紀の俳句として蘇らせた。

- 一新聞記者、しがらみのない書生俳句、新しい俳句運動、俳句活動の大半は病床

- 『病牀六尺』

- 柿くへは鐘が鳴るなり法隆寺

- 子規庵・高浜虚子・河東碧梧桐・内藤鳴雪・夏目漱石・斎藤茂吉・伊藤左千夫)

蕪村略年譜(一)

蕪村略年譜

(注)年齢は「数え年齢」

- 一七一六年(享保元年) 一歳――撰津国東成郡毛馬村(現在の大阪 市都島区毛馬町)に生まれる。芭蕉が没した一六九四年から二二年後のこと。出自は不明。姓の「谷口」は母方の姓といわれる。「与謝」を称するのは、一七六〇年(蕪村45歳)頃から。
- 一七三五年(享保二〇年)二〇歳――この頃までに単身で江戸に移り住む。
- 一七三七年(元文二年) 二二歳――日本橋石町に「夜半亭」の居を構えたばかりの早野巴人(夜半亭宋阿)に入門。「宰町」と号し、内弟子として同居。
- 一七三八年(元文三年) 二三歳――夜半亭歳旦帖に宰町号で発句入集。「卯月庭訓」に自画賛掲載される。
- 一七三九年(元文四年) 二四歳――其角・嵐雪三十三回忌集「桃桜」に、宰鳥号で発句入集。
- 一七四二年(寛保二年) 二七歳――早野巴人が死去。下野国(現在の千葉県北部)結城の同門砂岡雁宕のもとに身を寄せる。以後、「釈蕪村」と称し、関東・東北地方を遊歴。
- 一七四四年(延享元年) 二九歳――歳旦帖を刊行し、初めて「蕪村」と号す。
- 一七四五年(延享二年) 三〇歳――俳体詩「北寿老仙をいたむ」。
- 一七四六年(延享三年) 三一歳――この年に、江戸の増上寺の裏門近辺に住んでいた形跡。
- 一七五一年(宝暦元年) 三六歳――木曾路を経て、京都へ移り、毛越を頼る。
- 一七五四年(宝暦四年) 三九歳――丹後国(現在の京都府北部)宮津に赴き、見性寺竹溪和尚のもとに寄寓。

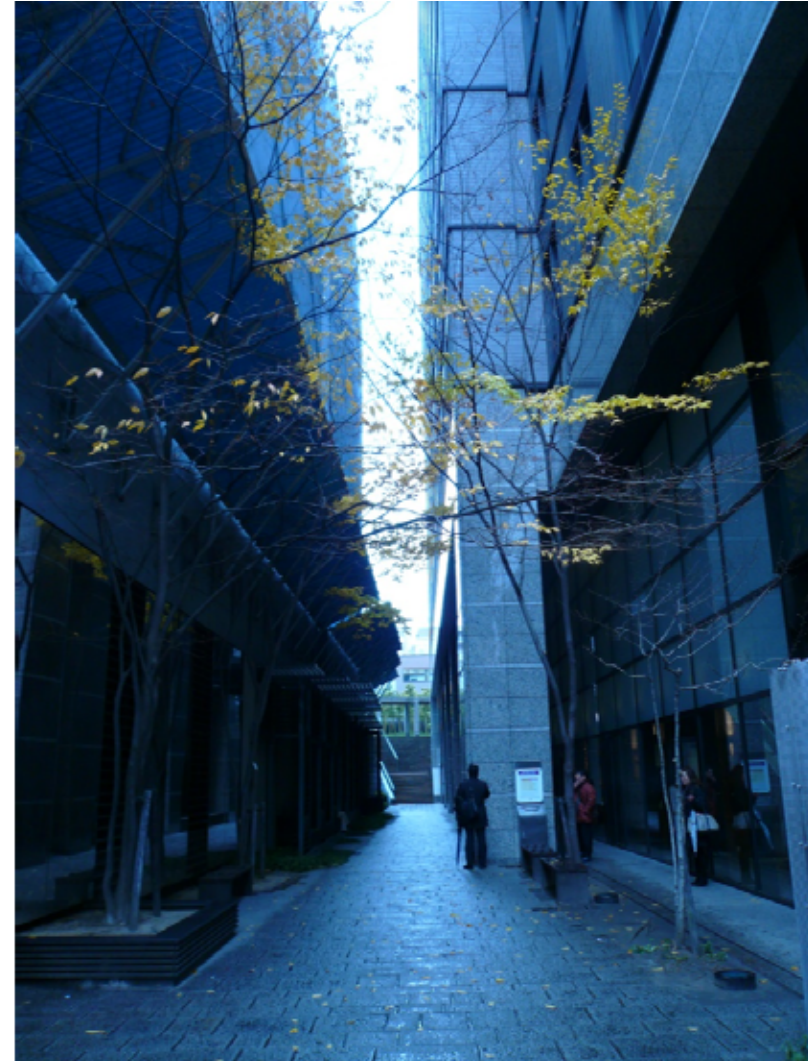
蕪村略年譜（一一）

- 一七五四年（宝暦四年）三九歳——丹後国（現在の京都府北部）宮津に赴き、見性寺竹溪和尚のもとに寄寓。
- 一七五七年（宝暦七年）四二歳——「天の橋立図自画賛」
。九月、京都に帰る。宮津にいた約三年間は、画業に重きを置き、神仙図や山水図を多く描いていた。
- 一七六〇年（宝暦一〇年）四五歳——この頃より与謝氏を称す。居を三菓軒と号す。この年あたりに結婚。正確な時期は不明。
- 一七六三年（宝暦一三年）四八歳——池田の田福宅へ往来。
- 一七六六年（明和三年）五一歳——初の三菓社中の句会を開く。この年の秋、妻子を京都に残して、讃岐国（現在の香川県）に赴く。
- 一七六七年（明和四年）五二歳——一旦京に帰り、再び讃岐に赴く。
- 一七六八年（明和五年）五三歳——四月頃、京都に戻る。
。「平安人物志」画家の部に登録（住所は「四条烏丸東へ入る町」）される。
- 一七七〇年（明和七年）五五歳——三月、夜半亭二世を継ぐ。
。三菓社中を夜半亭社中と改める。
- 一七七一一年（明和八年）五六歳——池大雅の十便図に対し十宜図を描く。
- 一七七二年（安永元年）五七歳——蕪村七部集「其雪影」成る。
- 一七七三年（安永二年）五八歳——蕪村七部集「此ほとり」 「あけ鳥」成る。
- 一七七四年（安永三年）五九歳——上田秋成著「成哉抄」に序す。呉春入門か。
- 一七七五年（安永四年）六〇歳——「平安人物志」画家部に再録される。住所は「仏光寺烏丸西へ入る町」。三月以来、病気になったが重篤には至らず。

蕪村略年譜(三)

- 一七七六年(安永五年)六一歳——金福寺境内に芭蕉庵再興を企て、写経社会を結成。一二月一人娘くのが結婚。蕪村七部集「続明烏」成る。
- 一七七七年(安永六年)六二歳——「夜半楽」、
「春風馬堤曲」、「澗河歌」、「老鶯児」、の三部作を発表。四月、兵庫に遊ぶ。「春泥句集」の序を記す。娘くの離婚。
- 一七七八年(安永七年)六十三歳——三月、几董と兵庫の大魯を訪問。
- 一七七九年(安永八年)六四歳——連句修行のため檀林会を結成。京の宿に木村兼葭堂を訪問。
- 一七八〇年(安永九年)六五歳——蕪村七部集「桃李」成る。
- 一七八一年(天明元年)六六歳——蕪村らが企画してから五年後、この年の五月、金福寺に芭蕉庵が落成。自筆の「洛東芭蕉庵再興記」を寄進。
- 一七八二年(天明二年)六七歳——「平安人物志」画家部に再録。金福寺芭蕉庵にて芭蕉忌。
蕪村七部集「花鳥編」成る。三月、吉野花見。
- 一七八三年(天明三年)六八歳——芭蕉百回忌追善俳諧に出座。蕪村七部集「五車反古」成る。
。晩秋頃から胸痛に悩む。一二月二五日未明没す。遺族は妻とも(一八一四年没)と娘くの。

与謝蕪村「平安人物志」に登録された住所の現況 京都市四条烏丸東入る



蕪村の発句(一)

(句の成立年次は「蕪村全集」による)

(○印は「与謝蕪村のこの一句」の上位十句)

- 元文二年(一七四三) 尼寺や十夜に届く鬢葛
- 寛保三年(一七四三) 柳散清水涸れ石処どころ
- 宝暦四年(一七五四)? ○夏河を越すうれしさよ手に草履
- 宝暦八年(一七五八) 離別れたる身を踏込で田植哉
- 宝暦十二年(一七六二) ○春の海終日のたりのたりかな
- 明和五年(一七六八) 鮎くれてよらで過行夜半の門
- 明和五年(一七六八) ○朝がほや一輪深き淵の色
- 明和五年(一七六八) 負まじき角力を寝ものがたり哉
- 明和五年(一七六八) 稲づまや浪もてゆへる秋津しま
- 明和五年(一七六八) ○月天心貧しき町を通りけり
- 明和五年(一七六八) ○鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分哉
- 明和五年(一七六八) 楠の根を静にぬらすしぐれ哉
- 明和六年(一七六九) 古井戸のくらきに落る椿哉
- 明和六年(一七六九) 不二ひとつづみのこして若葉哉
- 明和六年(一七六九) ○牡丹散て打かさなりぬ二三片
- 明和六年(一七六九) 閻王の口や牡丹を吐んとす
- 明和六年(一七六九) 白露や茨の刺にひとつづつ
- 明和六年(一七六九) 易水に葱流るる寒哉
- 明和六年(一七六九) 凧きのふの空の有り所
- 明和七年(一七七七) 御手打の夫婦なりしを更衣

蕪村の発句（一）

● 明和七年（一七七〇）

葱買って枯木の中を帰りけり

● 明和八年（一七七二）

ほととぎす平安城を筋違に

● 安永元年（一七七二）

三椀の雑煮かゆるや長者ぶり

● 安永二年（一七七三）

山は暮れて野は黄昏の薄哉

● 安永三年（一七七四）

○菜の花や月は東に日は西に

● 安永三年（一七七四）

○愁いつつ岡にのぼれば花苳

● 安永三年（一七七四）

門を出れば我も行人秋のくれ

● 安永五年（一七七六）

折釘に烏帽子かけたり春の宿

● 安永五年（一七七六）

芭蕉去てそののちいまだ年くれず

● 安永六年（一七七七）

梅遠近南すべく北すべく

● 安永六年（一七七七）

鮒ずしや彦根の城に雲かかる

● 安永六年（一七七七）

○さみだれや大河を前に家二軒

● 安永六年（一七七七）

○すすしきや鐘を離るる鐘の音

● 安永六年（一七七七）

花火見へて湊がましき家百戸

● 安永六年（一七七七）

身にしむやなき妻のくしを閨に踏

● 安永七年（一七七八）

菜の花や鯨もよらず海くれぬ

● 安永八年（一七七九）

さしぬきを足でぬぐ夜や朧月

● 安永九年（一七八〇）

ゆくはるや同車の君のささめごと

● 安永九年（一七八〇）

稲かれば小草に秋の日の当る

● 天明二年（一七八二）

春雨やものがたりゆく蓑と傘

● 天明二年（一七八二）

山暮れて紅葉の朱を奪ひけり

● 天明三年（一七八三）

しら梅に明る夜ばかりとなりけり

蕪村の俳詩(一)

『北寿老仙をいたむ』

- 延享二(一七四五)年一月二十八日、結城俳壇の長老、早見晋我(北寿老仙)が七十五歳で没した。その死を悼んで作られたものである。

- 萩原朔太郎によってこの詩の抒情性が高く評価された。
- 末尾に「釈蕪村百拜書」の署名から当時蕪村が僧となっていたことが分かる。
- この詩が世に公表されたのは、晋我五十回忌の追善集においてで、蕪村没後のことである。

- 北寿老仙をいたむ

- 君あしたに去ぬゆうべのころ千千に
何ぞはるかなる

- 君をおもふて岡のべに行つ遊ぶ
をかのべ何ぞかくかなしき

- 蒲公の黄に薺のしろう咲たる
見る人ぞなき

以下十二行略

蕪村の俳詩(二)

『春風馬堤曲』

蕪村編 『夜半樂』 安永六(一七七七) 年刊に所収

● 前書に：ある日やぶ入りで故郷に帰る若い女と道連れになり、同行数里、一八首からなる詩句でその女の心を詠んだ。

● 知人への手紙に：大阪から親もとまで、「道行」の形式をとった一場の芝居で、興行元は夜半亭蕪村、お笑い草めいているが、私の昔を懐かしむうめき声の詩。

● 「春風馬堤曲」原文一八首の句のみを抜粋

● やぶ入や浪花を出て長柄川
● 春風や堤長うして家遠し
● 一軒の茶見世の柳老にけり
● 憐みとる蒲公荃短して乳を浥
● むかしむかししきりにおもふ慈母の恩
● 故郷春深し行ゆきて又行ゆく
● 藪入の寝るやひとりの親の側(太祇)

蕪村の画―文人画 俳画

独学で様々な画風に挑戦した。

大和絵風の描写に始まって、様々な漢画様式を次々に手掛け、最終的にはまたもとの和画へと作風を回帰させている。

文人画の大成者として、池大雅と並び称される。

晩年、流れるような略体の美の俳画の形を確立した。蕪村の絵の旅の帰結点。

● 一七三五～五〇年（関東遊歴時代）和画様式

追羽根図

● 一七五一～五三年（京都）漢画墨彩様式

● 一七五四～五七年（丹後時代）漢画墨彩様式

花鳥人物図

● 一七五八～六六年（京都）十二神仙図・山川図

漢画着彩様式

● 一七六七～六八年（讃岐時代）草蘆三顧 肅何追韓信図

漢画着彩様式

● 一七六九～八三年（夜半亭時代）蘇鉄図屏風

和様化

● 十便十宜帖

池大雅 与謝蕪村

鳶鴉図

夜色櫻台図

俳画

奥の細道図

花見画賛（又平自画賛）

蘇鉄図屏風(重文)明和3~5年(1766~68)妙法寺



与謝蕪村筆「十宜図」より「宜暁図」 (国宝) 明和8年(1771)



夜色櫻台図1779年

伴画 奥の細道図1779年



与謝蕪村のこの一句」 現代俳人が選んだ上位句

● 柳川彰治氏の編集による現代俳人の選
ぶ蕪村のこの一句。
● 上位十句を「蕪村の発句」に○印で示す。
上位三句を再録する。

- 一位 菜の花や月は東に日は西に
- 二位 さみだれや大河を前に家二軒
- 三位 春の海終日のたりのたりかな

● 近年発見された「蕪村自筆句帳」(尾形
● 侂(編著)に蕪村自らのものと思われる
● 合点が記されている。この合点は、必ず
● しも現代俳人が選ぶ上位句とは一致し
● ていない。蕪村の発句に対する指向に興
● 味が持たれる。

与謝蕪村宅跡(終焉の地) 京都市仏光寺烏丸西入る



金福寺の芭蕉庵と与謝蕪村の墓



与謝蕪村 参考文献

- 蕪村自筆句帳 編著 尾形 仂 筑摩書院
蕪村全集第一巻発句 校注者 尾形 仂・森田 蘭 講談社
与謝蕪村集 校注 清水 孝之 新潮社
蕪村春秋 著者 高橋 治 朝日新聞社
蕪村集 編者 藤田 真一 和泉書院
蕪村 著者 藤田 真一 岩波新書
蕪村「画俳二道」 著者 瀬木 慎一 美術公論社
与謝蕪村集／小林一茶集 評釈者 栗山 理一・中島 武雄 筑摩書房
蕪村 放浪する「文人」 著者 佐々木 永平・佐々木 正子 新潮社
小林 恭二 野中 昭夫
蕪村 育ての心 著者 太田 正己 文理閣
蕪村のまなざし 著者 稲垣 克巳 風媒社
与謝蕪村のこの一句 編著者 柳川 彰治 青弓社
松尾芭蕉集／与謝蕪村集 著者 竹西 寛子 集英社
憧れの名句 著者 後藤 比奈夫 日本放送出版協会
秀句鑑賞十二か月 著者 草間 時彦 朝日新聞社
秀句鑑賞十二か月 著者 井本 農一 小学館
日本の美術 著者 田中 日佐夫 東京美術
日本美術史5 著者 橋本 治 新潮社
日本美術史年表 監修 辻 惟雄 美術出版社

